様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　5 月　26 日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：　2006～2009
課題番号：19720018
研究課題名（和文）　初期キリスト教思想における行為とその抽象化

研究課題名（英文）　Action and its abstraction in early Christianity

研究代表者
柳澤 田実（YANAGISAWA TAMI）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：20407620

研究成果の概要（和文）：本研究は、福音書と初期キリスト教の神学テキストを、現代哲学および生態心理学や脳神経科学など経験科学の成果を援用しつつ分析し、「隣人愛」「自己無化」「回心」といった抽象的な神学的概念の元にある経験を、身体的行為という観点から再構成するものであった。その結果、キリスト教の主要概念である「隣人愛」は接近という行為とその行為によって喚起される情動とのカップリングであることが明らかになり、また、イエスがもたらした「回心」の経験とは、イエスによって赦された人間の単なる内面的な経験に尽きるものではなく、その人間が生きる具体的な環境の再編成であることが明らかになった。以上のような本研究全体を通じて、宗教的テキスト、とりわけ聖書の読解に経験科学を応用する意義が示されたとも言える。

研究成果の概要（英文）：My research is to examine an applicability of the empirical science to the comprehension of the religious literature, especially Gospels and Christian literature. In my opinion, Jesus' ability to affect the self image of discriminated people was a result of his concrete social performances, which effectively challenged the current power hierarchy. However, in the process of theological interpretation and canonization, his activities underwent inevitable conceptualization, and their psychological effects came to be seen as independent of his concrete deeds and of the social and historical context in which they took place. Based on this hypothesis, by applying the results of contemporary philosophy and modern empirical science such as ecological psychology or neuroscience, I try to redefine the religious experiences written in these texts as mere body performances and its effects. As a result, the ‘neighborly love,’ that is one of the principal concepts of the Christian doctrine, can be explained by a coupling or a combination of the concrete act of approaching and of the emotion which are brought about by that act. Moreover, the “forgiveness” or “conversion” is not just an “inner” experience but also can be explained as a concrete reconstruction of the real environment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	2,100,000	0	2,100,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,700,000	480,000	4,180,000

研究分野：宗教学・哲学
科研費の分科・細目：宗教
キーワード：キリスト教・身体・行為

１．研究開始当初の背景

キリスト教が、ナザレのイエスの具体的な身体的行為を伴った活動に端を発するものであることは言うまでもないが、その具体的な活動が、一宗教の教理あるいは神学になるまでには数回の抽象化を経ている。イエス自身が人間としての生涯を終えた後、彼の活動は複数のグループによって記述され、そのグループによるテキストは更に編纂されて一つの聖典となった。更に、この聖書のテキストが、抽象化され、あるいは概念化されることによって、神学的テキストや教理に関するテキストが生み出されたのである。

このように一旦抽象的な概念や表象が形成されると、それらの概念や表象が宗教的言説の中心となり、結果、キリスト教はより内面的かつ内観的な宗教になっていった。今日のキリスト教思想の研究もこうした傾向性を共有しており、多くの議論が様々な神学的概念に大幅に依拠し、こうした概念の大元にあった具体的な行為およびそれによってもたらされた効果を軽視する傾向にある。

こうした状況において本研究は、ウィリアム・ジェームズによるプラグマティズムの宗教研究とゲルト・タイセンらの福音書に対する社会学的アプローチを参考にしつつ、さらにこれまでキリスト教のテキスト解釈には用いられてこなかった経験科学の知見を応用しながら、徹底して具体的な身体的行為に着目しつつ福音書および初期キリスト教のテキストを解読した。このような研究は、キリスト教の中心的思想を心・内面の変革とする主流の立場に対する一つの批判的視座も提供することになる。

２．研究の目的

本研究は、ナザレのイエスの具体的な活動が神学的・哲学的概念へと「抽象化」される過程に注目し、具体的な「行為」とその行為によって産み出された「効果」が「抽象化」されていったプロセスを明らかにすると共に、「隣人愛」・「自己無化」・「赦し」・「回心」などのキリスト教神学の根幹をなす様々な抽象的概念の元にある経験を、身体的行為という観点から再構成することを目的とした。

３．研究の方法

（１） 一次文献研究（福音書、ニュッサのグレゴリオスとアウグスティヌスに代表される初期キリスト教の教父による神学テキストの分析）
（２） 二次文献研究（ウィリアム・ジェームズの宗教研究、ジェームズ・J・ギブソン、エドワード・リード、ロジャー・バーカーらによる生態心理学の文献、近年の脳神経科学による宗教研究を読解し、自身の研究への応用可能性を探る）
（３） 生態心理学の定期的研究会への参加
（４） 福音書に簡潔に記載されたイエスの身体的行為が、どのように解釈され得るのかを中世からバロック期までの絵画作品において調査する
（５） 参考として、聖地など宗教的空間における身体的行為に関する調査（フランス、フォントネーのシトー会修道院、ヴェズレーでの現地調査）

４．研究成果

結果的に 3 年間の研究においては、教父のテキストにおける概念化・抽象化のプロセスの検討以上に、身体的行為に注目した福音書そのものの読解と、その読解において経験科学を援用する可能性の検討に多くの時間が割かれた。より具体的には以下の通りである。

（１）ルカ福音書 10 章の「よきサマリア人の譬え話」を中心に、福音書における「隣人愛」に関する分析を行った。「隣人愛」を「行為」と「身体の配置」という観点から解読した結果、福音書において「隣人愛」が、他者に急激に接近して離れるという「定型的イメージ」によって繰り返し語られていることが分かった。この結果にアントニオ・ダマジオ、河本英夫らが主張するソマティック・マーカー仮説を応用し、「隣人愛」を急激な接近と乖離という身体的行為と情動とのカップリングとして定義した上で、聖書をこのような行為と情動のカップリングを読者に条件づけるための書物として示した。この成果は、日本病跡学会および東京大学の延原幸弘教授の科学研究費補助金主催の研究会で発表され、本研究で用いられた福音書に対する科学的アプローチ自体は複数の研究者によって高く評価された。この内容は「イエスの＜接近＝ディスポジション＞：近づくという行為／行為の伝達」という論考としてまとめられ、編著書『ディスポジション：配置としての世界』（現代企画室、2008）として公刊された。

（2）キリスト教を身体的行為ではなく、内面的な宗教として確立するのに大きな影響を果たしたアウグスティヌスの思想を空間的表象という観点から検討した。まずアウグスティヌスを近代以降の「内観主義者」の祖とみなすか否かに関するアメリカの研究者たちによる論争を出発点に、アウグスティヌスの『告白』に見いだされる「内／外」という空間的表象を検討し、このような空間的表象が他者と共存する空間性を分断し、いわゆる私秘的内面性を構成することを明らかにした。これに対して、このような「内／外」図式とともに見いだされるもう一つの空間的表象である「近さ／遠さ」は他者と共存する空間性を実現する。また「近さ」とは人間を善い行為へと動機づける、神＝他者体験を言表する極めて重要な比喩であることを示し、これが福音書の隣人愛に関するテキストにおいても、また他の教父のテキストにも共通に見いだされる空間的表象であることを明らかにした。これらの結果は、東方キリスト教学会のシンポジウムにおいて発表され、当学会の学会誌に論文として掲載された。

（3）キリスト教徒でもある日本を代表する舞踏家、大野一雄のパフォーマンスを、福音書（特に『ヨハネ福音書』8 章）のイエスの実践と併置し、生態心理学のアフォーダンス理論を参照しつつ読解した。このような読解によって、大野もイエスもともに、内発的意志や意識によってではなく、周囲の事物や他者にその都度その都度反応することによって自らの身体的行為を生み出していることを明らかにした。また、両者には、身体を精神によって統御するというデカルト的心身理解に代わるものとして、身体の自律性を認めつつ、その動きを情動によってたぐり寄せるという心身理解が見いだされ、それが「魚釣り」という秀逸な比喩によって語られていることも明らかにした。この成果は、大野一雄の国際シンポジウムにおける講演において公開され、同シンポジウムの内容をまとめた紀要に論文として掲載された。この成果は、舞踏やダンスの専門家から大きな反響を得、その後近畿大学のコミュニティカレッジやダンスのワークショップなどでもこの研究を基盤にレクチャーを行った。

（4）近年、欧米においては、認知科学や脳神経科学による宗教の自然化が盛んに試みられている。本研究はこのような流れを受け、その代表者の一人であるパスカル・ボイヤーの宗教に対する進化生物学的・認知科学的アプローチをキリスト教に応用することにより、宗教的経験を経験科学の知見によって自然化する際の問題点と可能性を検討した。その結果、宗教的経験は特権的経験として単独に扱われるべきではなく、人間の生物としての認知システムに立脚した心の働きとして、また、宗教に特有な利他的行為の動機づけとして捉えられるべきことが明らかになった。宗教特有の利他的行為はしばしば生物個体を犠牲にし、その意味において、生物の自己保存原則を逸脱しているように思われる。この点を説明することが、経験科学による宗教の自然化には不可欠な課題であることもまた確認された。この研究は、玉川大学脳科学研究所主催の研究会で発表され、脳神経科学者から大きな反響を得た。この時の成果をもとに、宗教への脳神経科学によるアプローチについて、東北大学の原塑准教授との共同研究が始まった。またこの内容は紀要『南山神学』第 32 号に掲載されている。

（5）イエスが与える回心体験を、単なる内面の変革ではなく、具体的かつ実在する権力布置の変革として捉えなおす試みを行った。まずはこうした議論の土台となるべき理論として、生態心理学者のロジャー・バーカーとミシェル・フーコーの権力論を検討した。その結果、バーカーの行動セッティングという概念が、フーコーの権力の布置（ディスポジション）という概念と類似していることを明らかにした上で、彼らが共に、行動セッティングあるいは権力の布置の内部にいる人間が自らを条件づけている権力の配置を知覚しそれを改変する可能性を積極的に認めていないことを示した。その上で、バーカーの後継者たちの議論を参照しつつ、またヨハネ福音書 8 章におけるイエスの権力布置の改変を再読しながら、いかにして特定のセッティングの内部にいながら権力配置を知覚できるのかについて検討した。さらに、レンブラントの集団肖像画を用いながら、実際に権力配置が直接知覚される可能性についても示した。この萌芽的な研究成果は立教大学の河野哲也教授主催の生態学的環境研究会において発表され、将来性があるとの評価を受けた。報告者は現在もこの方向性で研究を進めており、生態心理学の専門家の協力も得て、視知覚による社会的力・権力の直接知覚の可能性を探求している。

（6）（5）の成果に立脚し、『ヨハネ福音書』8 章と『ルカ福音書』7 章を題材にして、ロジャー・バーカーの行動セッティング概念を用いることにより、イエスによる権力布置の改変がより明確にできることを明らかにした。このことからイエスのもたらした「赦し」とは単なる内面的な解放に尽きるものではないことが主張されるとともに、こうした「赦し」の物質性が「借金帳消し」の比喩に賭けられていることが示された。この内容は、表象文化論学会において実在論（リアリズ

ム）をテーマにしたパネルにおいて発表され、大きな反響を得た。と同時に、本来具体的な行動分析のための方法論であり、テキストなどの分析には用いられない生態心理学を応用することの是非については課題として残され、これは現在の報告者の研究対象となっている。本研究の内容は、論文としてまとめられ、紀要『南山神学』第 33 号に掲載された。

（7）ゲルト・タイセンによる Erleben und Verhalten der ersten Christen. Eine Psychologie des Urchristentums, Gütersloh（邦訳『原始キリスト教の心理学：初期キリスト教徒の体験と行動』）を精読し、聖書に対する心理学的アプローチの可能性について検討した。この内容は一部（6）末尾の論文にも反映されている。

（8）福音書に記載された身体を用いた権力布置の改変に、画家たちがいかに自覚的であったかを画像のインターネット・アーカイヴを用いた調査によって確認した。とりわけ 17 世紀の画家・レンブラントは、イエスの身体的行為とその効果を描くことに意識的であったことが判明し、レンブラントに関する文献調査も行った。この結果を受け、報告者は、権力の視知覚に関する具体例としてレンブラントの絵画を生態心理学によって分析する研究に着手している。美術史におけるこうした観点でのレンブラントの絵画分析は、集団肖像画などについては簡単なものが存在するが、まだ本格的には展開していない。したがって報告者の研究が、正確な科学的手法を土台に実現するならば、レンブラント研究としても大いに貢献するものになるだろう。

以上の研究は、福音書読解、より広く言うならば宗教に対する経験科学の応用の有効性を示すものである。これらの成果は 3 年間の間に、下記に記載された様々な学会や研究会以外にも、生態心理学・認知科学や芸術をテーマとする研究会などで招待講演としても発表された。こうした研究交流のおかげで、報告者の研究には、多くの研究協力者が生まれ、また新たなプロジェクトが発足した。

生態心理学の応用については、生態心理学を基盤に生態学的により優れた環境デザインを模索する東京大学の村田純一教授・佐々木正人教授を中心としたプロジェクトと、同じく生態心理学を社会的事象の分析にまで適用していこうという立教大学の河野哲也教授を中心としたプロジェクトが発足し、2010 年からの科学研究費補助金基盤研究に採択され（課題番号：21320003、21320010）、報告者はそれらの分担者として、今回報告した研究に連続する新たな研究に乗り出している。これらのプロジェクトの研究課題は、ジェームズ・J・ギブソンが『生態学的視覚論』において萌芽的に示した、社会的な行為可能性（アフォーダンス）を直接知覚できるという議論に立脚するものであり、世界的に見てもまだまだ未開拓な領域である。これらのプロジェクトにおいて報告者は、本科学研究費補助金研究において着手した、直接知覚の対象と概念・表象との関係について、また社会的力・権力の直接知覚の可能性について、生態心理学者の協力・指導を得ながらより本格的に取り組んでいる。

また脳神経科学に基づく宗教研究については、脳神経科学の成果に基づく哲学的研究で知られる東北大学の原塑准教授との共同研究が始まり、宗教における利他的行為がいかにして可能なのかを明らかにするべく、fMRI などの実験に落とし込む方法について議論を重ねている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 柳澤田実、カリス＝借金帳消しのリアリズム：福音書に対する生態心理学的アプローチ、南山神学、南山大学大学院神学研究室、査読無、第 33 号、2010、35－60
② 柳澤田実、宗教的経験と行為の動機づけ：経験科学に基づく宗教研究の可能性、南山神学、南山大学大学院神学研究室、査読無、第 32 号、2009、125－148（http://www.nanzan-u.ac.jp/JINBUN/Christ/NJTS.htm#柳澤　田実）
③ 柳澤田実、キリスト教から読む大野一雄：魚釣りとしての人間、言語文化、明治学院大学言語文化研究所、査読無、第 25 号、2008、40－56
④ 柳澤田実、内と外／近さと遠さ：内観主義と教父哲学、エイコーン、東方キリスト教学会、査読有、第 36 号、2007、53－74

〔学会発表〕（計８件）

① 柳澤田実、社会的力への生態学的アプローチ、生態学的環境研究会、2009 年 5 月 25 日、立教大学
② 柳澤田実、宗教的経験とナルシシズム：利他的行為の動機を問う、脳リテラシー部門研究会「宗教と脳科学」、2009 年 3 月 14 日、玉川大学脳科学研究所
③ 柳澤田実、借金帳消しのリアリズム：福音書への生態心理学的アプローチ、表象文化論学会、2008 年 7 月 6 日、東京大学駒場キャンパス

④ 柳澤田実、伝播する接近：福音書における行為と内観、日本病跡学会、2008 年 5 月 23 日、東洋大学
⑤ 柳澤田実、入れ子としての世界、境界としての人間：ミシェル・フーコーからバリー・スミスへ、公共哲学京都フォーラム、2008 年 3 月 23 日、京都リーガロイヤルホテル
⑥ 柳澤田実、キリスト教から読む大野一雄：『魚釣り』としての人間、国際シンポジウム「大野一雄・舞踏と生命」、2007 年 11 月 18 日、明治学院大学白銀キャンパス
⑦ 柳澤田実、アウグスティヌスにおける言語と私秘性、中世哲学会、2007 年 11 月 11 日、広島大学
⑧ 柳澤田実、実践の伝達・行為の抽象化、東方キリスト教学会例会、2007 年 8 月 31 日、長野県茅野市ホテルハイジ

〔図書〕（計 1 件）
① 柳澤田実編・共著、ディスポジション：配置としての世界、2008、現代企画室、5-17，50-83,114-115,144

〔その他〕
報道関連情報
① 河本英夫氏、稲垣正浩氏との対談、『談』36 号、特集「エンボディメント…人間=機械=動物の身体」、2009
② 自身の研究紹介、朝日新聞「テイクオフ」、2010 年 5 月 16 日夕刊

６．研究組織
(1)研究代表者
柳澤　田実（YANAGISAWA TAMI）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：20407620